



岩 婦 の 宿 山 本 秀 男

サイクリングが旅の一つでもある限り、そこには旅人の眼がなければならぬ。旅をして何を見、何を感じ、何を得て来たか、一般の旅行者では殆ど訪れる事のない、房州のひなびたこの鉱泉はサイクリストのものであろう。そこにサイクリストでなければ書けないサイクリング紀行の一つの型がある。

ある。彼女は「第一、安く泊めてくれませう。そして歓待してくれませう」と推薦する理由を挙げていた。ただし半里以上山の中へ入らなければならぬとつけたした。

私には、彼女の説明のなかから、宿の輪郭を型造ることが骨であつたが、有線放送で宿を呼び出し、部屋の有無をたしかめるのを聞いては、逆らひきれなくなつてしまつた。もともと、金の続くだけ房総に遊ぼうと、東京を出てきたのだから、安く泊めてくれるという保証がある。以上逆らう必要もなかつたからである。同行の柴田君は、私にまかせるといふような顔をしていた。

菓子屋の主と、房州の海岸や山について雑談しながら手をあぶつているときは、すでに彼女が呼んだ迎への者が、宿を出て山をおりているはずだつた。

思えば旅というもの面白。もしこの菓子屋で柴田君が百円足らずの買物をしなかつたら、岩婦の名前さえ知らずに旅を終つたらう。そして予定どおり同じ町外れの高崎鉱泉に泊つていたはずである。現にそのつもりで千葉街道をむやみに飛ばし、北風に追われて房州街道を下して、百三十軒の道のりをここまで走つてきたのだ。それが成行で、いつの間にか予定が交つてしまつたのである。

宿の迎えは、二十四、五とみえる若者

暖かいはずの房州でも、どうかすると雪のちらつく日があるという。私たちが岩井という海沿いの小さな町に到着した時は、そんな寒さの日の暮れだつた。町は南北に細長く舗装してあつたが、それだけに北風はどこにもぶつからず、まっすぐに吹き抜けていた。自転車からおりると、ものの五分もたたないうちに

震えあがつてしまつた。

そんなとき、私たちが火鉢に呼んでくれたのは常盤屋支店という菓子屋の細君だつた。

「こんな寒い日に自転車じや大変でしょうねえ」

彼女はなんべんもそういつた。

「道楽なら寒中じつとして魚釣をする

人だつてあるくらいですから——」

そんな説明も、わりあいよくのみこんでくれたが、

「こんな夜は、薬湯に温まつてお寝みなさい。寒さを知らずに眠れますよ」と奨めた。

彼女はさつきから、岩婦鉱泉に今夜の宿をとるように私たちに奨めていたので

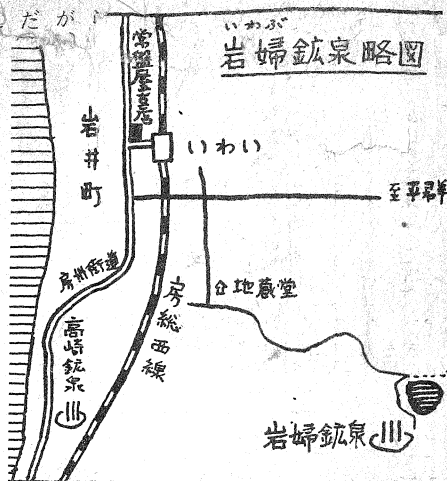
まつすぐに吹き抜けていた。自転車からおりると、ものの五分もたないうちに

彼女はなんべんもそういつた。「道楽なら寒中じつとして魚釣をする

彼女はさつきから、岩婦鉾泉に今夜の宿をとるように私たちに奨めていたので

宿の迎えは、二十四、五とみえる若者

岩婦鉾泉略図



の誇りであるようだった。富山は富士山をうんと小さくしたような山で、いかにも房州の山といった姿であつた。だが頂上の木の姿が夜目にもわかるような、とても小さな山であつた。はたして房州一かどか疑わしいとは思つたが、あまりに若者が純粹であつたので、あえて逆らわなかつた。それよりも、岩婦へいく段々島の中の道から、名のあふ山がみえることはやはり私たちにとつても楽しいことだつた。

愛宕山で四〇五米、有名な清澄山が二番目で三三三米、次に嶺岡山が三六〇米、その次が富山で三四九・五米であつた。若者は、この息子だそうだが、その後一度も顔を合せなかつたので、間違ひは指適しておくことができなかつた。

三方山に囲まれた岩婦は、北側だけ開けていた。そのせいだろう、北風がぶつかつてくるのがよくわかつた。宿は主家と浴室と二棟で、廊下が二つの棟をつないでいた。廊下の冷たさは素足には厳しすぎるほどだつた。とにかくその日の寒さは格別のものであつた。客間は二部屋あつて、床の間つきの十畳間と、切りこたつのある六畳間である。電気がないので石油ランプを使つて、古風なホヤは指でついたら割れてしまうのではないかと思うぐらい、薄く見えた。それ程よく磨かれていた。天井をみると電気のこない蛍光灯が二本、白い線を画いていた。便所はランプがないから、懐中電灯をもつていかないと用が

だ。善良そうな、どちらかというところだ。せ型の体つきであつたが、足はなかなか強かつた。荷台に大きな駕籠をつけた重そうな実用車に乗つてきたが、デコボコな登り道を、ランプもつけず、どんどん山に入つていった。私たちの車と一諸では、のろろ走つたのでは悪いと思つたのかも知れないが、私たちは少々閉口していった。

「あれが富山です」

若者は前方の山をさした。雲がすつかり落ちた空は、丁度満月で明るかつたが前方の山々は稜線だけでなく、一つ一つの巒までもはつきりみえていた。

「房州で一番高いそうですよ。鉾山は三三三〇米ぐらいですね。富山は三五〇米あります」

若者の声は澄んでいた。有名な鉾山よりも富山の方が二〇米も高い。それが彼

まもなく堰堤があつた。百八十度向きをかえて車を押しあげると、そこには三方山にかこまれた堰があつた。水が満々と張つていて、大変深そうに見えた。そのむこうに、あまりにも暗い灯影がみえた。

「あそこです。五万分の一の地図にはこの堰が出ています」

そいいながら若者は私たちが玄関まで案内した。駅から二・五料、十五分の道のりであつた。

あとで地図をみたら堰は勿論、通つて来た細い道も全部でっており、更に岩婦にたつた一軒のこの宿も、記号として出ていた。それが若者にとつても大きな誇りに違いないだろうと思うと、ひとりりで微笑が浮んでくるのであつた。

なお若者が「房州で一番高いそうですよ」といつたのは間違つていた。一番が



岩婦鉾泉のたたずまい



つたか調べてみたら、巨盗稲葉小僧新助が三四才で刑死したと出ていた。

まえにも述べたが、この宿には電気がない。半原の塩川鉱泉だつてそうなのだから驚くには当たらないかも知れないが、ローカル線とは云え房総西線というレツキとした国有鉄道の沿線である。しかもその駅から二・五軒の所に電気がきていないと思うと、やはり驚かざるを得なかつた。ここにくるまでの途々に点在する農家は、たとえ暗くても全部電灯が灯つていた。どうやらこの一軒だけ取り残されたのみである。

「よく地図が読めますね。若い人は羨ましいですわね」といいながら主はランプを引き下げてくれたが、

「やはり電灯がいいです。便利ですし芯が油に落ちやしないかという心配もありませんから。第一不経済です。毎日毎日ホヤ掃除をしなきゃならないし、ホヤは年中こわれるんですよ。あなた方にはわからんでしょうな」とこぼしていた。そして電灯をひくつもりだが、たつた一軒なので工事代として二〇万円も負担しなければならぬといつていた。これも私たちの知らない話

たせなかつた。大体宿はこういう塩梅であつた。これは宿の主から聞いた話だが、岩井町の岩井といふところには、この宿が一軒あるさうであつた。あと人の手に馴らされたものといへば田が十数枚と、宿の前の堰が九段五畝ですべてで、牛も犬も飼つてあるのである。堰は天明五年に出来たといふからいまから一七三年前の構築である。その年にどんな事件があつたか調べてみたら、巨盗稲葉小僧新助が三四才で刑死したと出ていた。

たやはりここは日帰りの湯治客を相手

であつた。

電気がないけれど有線放送が入つていゝる。三千円づつ出し合つて農協で作つたそうだが、昨年道志村へいつたときも、同じものがあつた。道志村では千葉へ見学にいつて作つたというから、こつちのほうが大体先輩格であるらしい。時間で電話の用を足せるが、その他の時間は農協でかけるラジオが聞ける。

「あしたの天気はどうだろう」と聞いたら、翌朝のラジオできけばわかると答えた。翌朝天気予報を聞くと思つたが、聞きそこねた。「お客さんがお寝みのときラジオをかけては悪いと思つたので」と婆さんは云訳をしていたが、そんな調子だと天気予報を聞く日は稀だろう。

かんじんの薬湯に入れるまでには、随分永い時間待たされた。日帰りの子供連れれの夫婦が帰らなかつたためでもあろうが、それにしても待たされた。だから主が「この薬湯は硫化水素泉で——」と、分析の結果を語り、胃には著しく効果があり、傷によく効くことは古くから知られてゐる等、その効能書を並べているときも、なかばうわの空であつた。それよりも千葉の町外れで、月見うどんを一杯入れただけの胃の腑が承知しなかつたのである。

大体、小さな鉱泉宿に限つて能書が多

あなたのクラブモデルに
スペシャルクラブ



好評発売中

17号スワローサドル
サイズ53 $\frac{1}{4}$ "×11 $\frac{1}{2}$ "
重量 800g

2019
4598
0548

東京都大田区東六郷3ノ5 蒲田 有明工業株式会社

い。医者に見はなされた病人がなつたとか、傷に薬はいらぬとかいつた類である。それだけに宿の主は奉仕的である場合も多いわけだろう。これが有名な温泉場へ行つたり、バスが玄関の前でとまるような鉱泉だと至極無関心で、鉱泉分析表には効く病名が書いてあるのに、女中に聞いても「さあ」といふような顔をする。

この主が私たちを大変待たした理由は浴場へいつたらすぐわかつた。新しい客のために湯あかをきれいに金網ですくい出し、鉱泉を一杯に注ぎ立て、あらためて熱くしていたのである。浴槽は勿論流し場もきれいに磨いてあつた。流しは

に出来たというからいまから一七三年前の構築である。その年にどんな事件があったか。

石を敷きつめてあつたが、浴槽も石作りであつた。

「これじゃ沸かすのに大変だろう」

「大変は大変です。やはり木の湯舟のほうが、沸きが早くて経済的なんです。けれど、やはりこの方がさつぱりしますんで——。そうですね、薪は一日に三十五、六把くらい使います」

昨年裏丹沢の中川の湯に泊り、箒沢から奥へ入つたとき薪作りの一家に会つたが、彼らは一日に十五、六把がせいぜいと答えた。そんな話がいまさらのように思い出された。

窓際に石油ランプの吊下つている浴室は広くて、旅に来たという思いをしみじみと味わせてくれた。北風のぶつかる音が妙に淋しかった。

土り際に読んだら、大人三〇円、子供二〇円、一日百円と料金表が貼つてあつ

もりだが、たつた一軒なので工事代として二〇万円も負担しなければならぬといつていた。これも私たちの知らない話

たやはりこは日帰りの湯治客を相手の鉱泉らしい。

湯から上つて座布団にあぐらをかいていたら、腰がホテツて来た。柴田君も同じことをいつていたので、食膳を運んできた婆さんにその話をしたら、

「そんな結構なことはないじやありませんか」

と口に手を当てて笑つていた。

大部古い話だが、木更津に泊つたときのことである。同宿の或るセールスマンがこんなことをいつていた。

「木更津じやこの伏見屋が一番いいです。何故つて？ 女中が飯のとき附いていないからですよ。私しや魚の骨に湯をかけて、それを吸うのが大好きで家じやきまつてやるんですが、旅に出ると、き

入れただけの胃の腑が承知しなかつたのである。

大体、小さな鉱泉宿に限つて能書が多

まつて女中が飯が終るまで附いているでしょう。あまりかつこうよくないからで

きないんですよ。千葉へきてそれができない

です、その点で気に入つたのは——」

岩婦の宿をもし彼が知つていたら、こ

こもきつと推薦するに違いない。婆さんと息子と二人で食事を運んできただけである。酒の好きな二人は、まずお銚子を

たのんで、ちびりちびりやりはじめたが、それは静かなものであつた。若山牧水の「酒は静かに飲むべかりけり」という歌が、なんのきつかけもなしに、ふと思ひ浮べられるほどの静かな、そしてうまい酒であつた。

出し、鉱泉を一杯に注ぎ立て、あらためて熱くしていたのである。浴槽は勿論流し場もきれいに磨いてあつた。流しは

酢の物の味は格別だつたし、名前の知らない白身の焼ざかなも美味かつた。欲を

いへばきりがなが、ともかく六品ついで一泊、二食付四五〇円という値段は信

じられないほど安い。誰が料理を作つて

いるのかをあとで聞いたら、娘だといつ

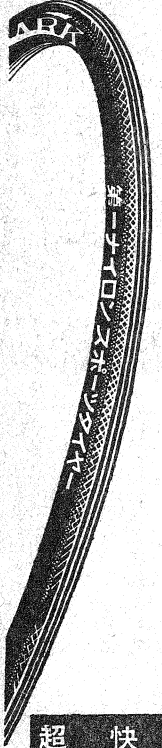
ていた。これだけの料理ができれば嫁にいつても喜ばれるだろうと婆さんにいつたら、

「出ていかれちや困るんです。こうして親子四人だから出来るんですから。そうはいつても、いつまでもというわけにはいかないんでしようけど——。当人もこんな山の中にいるのを嫌がつてゐるんですがね」

といつていた。

食後の一浴は僅かな量の酒をよりまわらせてしまつた。ランプを下けてもらつて床にいつたが、その噴隣の客の話しが

スポーツ車専用
超スピード



第一のナイロンタイヤ

超 快 速

1. 極細で強力
のナイロン糸
2. 強弾力の純良ゴム
3. 独特の成型法

超 強 靱

- ・スタレの強さは
綿の3倍強
- ・ビニロンの2倍強

強 耐 熱 性

特殊処理のナイロン糸で耐熱性強し

超 緩 衝

ゴムは最高の純良ゴムで、1%で1.4に匹敵するクッション尚ショックに強い

多 條 鋼 線

ビード(耳)は多条鋼線(ノージョイント)で、折曲げ自由、丈夫で外れない

カラー
5 色

第一ゴム製造K.K.

東京都調布市深大寺 2335

大きくなつてきた。

隣の客は、中年の夫婦であつた。女は自分で作つたのだらう、中年の女の好みそうな手芸品の手さげ袋をもつていたが、体はあまり丈夫そうでなかつた。話声も女の方は全然聞えなかつた。もつぱら男が宿の主と息子に話かけていたのだ。

「一つ軍人は忠節を尽すを本分とすべし——。こういうことをいつても君ら若いものにやわかるめえ。なあ親父さん、今の若いものは団体生活をしたらんからいかん。すぐ個人の幸福のみ追求する。要するに理解力がたらんのだな」

ひどい客もあつたものである。若者をいじめて酒の肴にしている。すでに大部酔つていようだつたが、ともすれば、そんな言辭をろうする年頃に入つてしまつた自分自身を、隣の客にみせられていようで気持よくなかつた。

だが若者は黙つてはいなかつた。富山を房州一の山だと思ひこんで誇つている彼ではあるが、若者のいうことは筋がとおつていた。彼がいうように本場の理解力を若いころもつていたら、いまの中年の人々は「忠節を尽すを本分とすべし」とは誦じなかつたのではなからうか？ そんなことを寢床の中で考えているうちに、いつか眠つてしまつたが、親父にたしなめられながら云いたいことを云つていた若者の、きよらかな顔はいまだに忘れられない。

翌朝、鉱泉でゆでた卵を土産にもらつて私達は宿をたつた。朝は富山も一そうよく見えた。すべるようにして海岸へ下つていく私たちは何人も百姓に会つたが、みんな目で私たちを追つていた。背中に視線を感じるような気がした。それは昨夜さいた宿の主の話をおもいださせるのであつた。

漁師たちは、大漁のときは赤いハンテンを着た。白く鯛をそめぬいたものであつた。彼らがハンテンを風になびかせて、この岩場への道を、何人も何人も歩いてら、きつと目立つたことであらう。その姿はいまでも目にかへることができそうだ。そうした彼らを、百姓たちは冷たい目で見送つたことにしよう。土にかじりついている百姓たちからみれば、あぶく銭を掴んで昼日中赤いハンテンをきて湯場へ遊びに行く漁師は、どれほどヤクザに見えたらう。そうした百姓たちが駐在に注進したのも当然だつた。今から二十四、五年前の岩場は、トバク場だつたのである。もともとは石工、傷によく効くんで開いた湯場だが、テラ銭かせぎをはじめたのが運のつきであつたのだ。

もちろん、この話がどれほど正確であるかはわからない。東京に住んでいたという宿の主も、いずれは誰かに聞いた話であるに違いないからである。だがそんないい伝えめいた話でさえ、なにか真実を語つているような気がするから不思議である。

だが、二〇年后新しく生れ変つた薬湯、岩場の宿も、やはり町場、人や浜の人の遊びにくるところのようだ。婆さんにたしなめられて口をつぐんだ主の言葉はそんな事情を暗示しているようで、いつまでも頭から離れなかつた。

「政府がいけないんですよ。戦争中は工場の皆様、産業戦士だなんておだてたかと思つと、戦後は農家の皆様、農家の皆様とおだてるんですから、百姓だつて増長しますよ。どうですあんな百姓に金を掴ませたら、ポロにくるんでタンスにしまふことしきや知らねえんですから。やつぱり百姓に金を持たせるもんじやねえですな。みなさい、あんなに都会のものの着物をはいでいても、いまじやはがれた方の都会の人の方が立派な着物をきてるじやねえですか。金は使うためにあつてことを知らんのですな」

そんな話をうんうんと聞いていたのを、百姓にきかれたような気がするほど、岩井町まで下りる間、ゆきかう百姓の目が気になつた。それはかつてこの山村を走つても、感じたことのない不思議な感覚であつた。

その日も、そのまた翌る日も、房州海岸の港に碇泊している漁船という漁船はみんな赤い旗で飾つてあつた。

そうだ、私たちは山の中にいる間中、たつた一晚ではあつたが、その日が正月三日であることを忘れていたのである。

第二回集印

サイクリング実施

第一回の集印サイクリングが、意外の好成績であつたことに鑑み、関東サイクリング普及協議会では、第二回を来る三月一日から五月末日迄の三ヶ月間に実施するため、目下第一回の実績を参考として、新しい案を企画中である。

第二回は第一回の集印帖が、不足したため参加出来なかつた多数の人々があつたので、参万部の集印帖を予定し、様式を改め、範囲を関東一都六県とし、各都県の観光課及び観光協会が、積極的協力の申出があり、自由スタンプ所を廃し、大体都県の選定した、三百箇所指定スタンプ所を設定、押印スタンプも全部日付入りの特定スタンプを新調、集印サイクリスト、必ずこの特定スタンプを押して貰ふことになるようである。

集印帖には協議会調製の関東一円五十分の地の図を附け、この地の図には道路の状況も記録し、走行に便し、相当立派なものが出るようである。そのため無料配布とせず、三十円位の実費配布とすることとなるであらう。

手帖の配布申込先は、東京都台東区竹町一一番地東部自転車工業協同組合内関東サイクリング普及協議会事務局宛である。